草石蠶

〔毛吹草三〕山城　紫蘇

〔書言字考節用集六生植〕草石蠶甘露子、滴露子、並同、見本草、

〔本朝食鑑三柔滑〕知也宇呂岐

集解、卽草石蠶、一名甘露子、古來未聞有、近世華舶移種、頃者家家栽之、二月生苗、長者近尺、方莖對節、狹葉有齒、並如荏葉、但葉皺有毛、四月開小花成穗、如紫蘇花穗、結子如荊芥子、其根連珠、狀如老蠶、或根之旁引一絲、著連珠者亦有、四五月采根煮食之、味微甘而淡、以爲蔬爲菓耳、

〔和漢三才圖會百二柔滑菜〕草石蠶　甘露子　地蠶　土蛹　滴露　地瓜兒　知也宇呂木○中略

按草石蠶近年有之、撓莖埋地、則節々生根也、其根二三寸、正白色、促節、形狀略似柳蠹、用淡醬油煮食、

〔農業全書五山野菜〕甘露子

甘露子、又草石蠶とも、地瓜兒とも云、今俗にてうろぎと云物なり、苗の時四五寸、長じて後は莖ながくつるのごとし、かどありて節ごとに葉向合て生じ、薄紫の小花をひらく、其節々より、土に根ざし、かいこのごとくなる白き根多く生ず、玉をつらぬきたるごとくつゞきて、白くすきとをりて、きれいなる物なり、味甘く煮て、茶うけ、くはしにもなり、あへ物、吸物其外に物などに入、料理色色あり、めづらしき物なり、殊に多く作りては、飢をも助るものなり、多く作り、飢を助ると記せり、種る地の事、圃の少日かげの所を畦作りし、夏月に麥ぬかを多く覆て糞とす、一尺餘り間を置てうゆべし、芸り培ひ、廻りをも草なき樣にきれいにし、又上より麥糠を覆ひをけば、かぎりなくさかへて、纔なる圃の端にうへても、其根たくさんにいでくる物なり、淨く洗ひ、かはかして、蜜に漬、醬に藏して、甚よき物なり、土地廣き所にては、多く作りて、飢を助くべし、陰地の肥たるによし、木かげなどにも種べし、やせ地かはきたる地によからず、

羅勒

〔多識編三菜〕羅勒、惠阿良良岐、異名香菜、綱目醫子草、